

メタファーの認知的基盤と経験的基盤

靱山 洋介

1. はじめに

本稿は、認知言語学の枠組みにおいて、メタファーの認知的基盤と経験的基盤を明らかにすることを狙いとするものである。なお、本稿におけるメタファーとは、「2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻」(靱山(2002:65))のことである。¹例えば、「あの人に比べたら、私などはまだまだヒヨコです」における「ヒヨコ」の意味は、「ヒヨコ」の本来の意味からメタファーに基づき拡張したものである。つまり、「ニワトリの雛」と「一人前になる前の段階の人」との間に「成長の初期の段階にあるもの」といった共通点を見出すことによって、本来「ニワトリの雛」を表す「ヒヨコ」という語を「一人前になる前の段階の人」を表すのにも用いているということである。

以下、本稿の構成について簡単に述べる。

まず、2節では、先行研究を踏まえて、認知言語学の基本的な考え方について確認する。

3節では、メタファーの認知的基盤について検討し、特に、「比較する」という一般的な認知能力が、メタファーの基盤として重要な役割を担っていることを明らかにする。

4節では、メタファーの経験的基盤について考察する。特に、語(などの言語表現)の「百科事典的意味」が、メタファーによる意味拡張の重要な基盤を成しているということを主張するが、百科事典的意味は、人間が様々な経験を

通して身に付けたものである。

5節では、本稿のまとめを簡単に述べる。

2. 認知言語学の基本的な考え方

本節では、Fillmore(1982)、Lakoff(1987)、Langacker(1987, 1999)、国広(1994)、吉村(1995)、山梨(2001)、籾山(2002, 2003, 2006a, 2006b)、Croft & Cruse(2004)、Evans & Green (2006)などを踏まえて、認知言語学の基本的な考え方について簡単に確認する。認知言語学は、少なくとも2つの点で(生成文法などの)他の理論と明確に異なる。

第一に、認知言語学は、言語は人間の有する認知能力(に基づく営み)を基盤とするものであると考える。この考え方は、個別言語の言語能力、さらには普遍文法といういわば言語専用の能力・知識の存在を仮定し、その解明を目指す生成文法などの考え方とは明確に異なるものである。なお、認知(能力)とは何かということに関して、認知言語学者の間で完全に意見の一致を見ているわけではないが、ここでは広く「人間が行う(身体に基づく)感覚的・知的・感性的な営み一般」と考えておく。

本稿では、メタファーの基盤として、「比較する」という認知能力が重要な働きをすることに注目し、3節でやや詳しく検討するが、ここでは、「比較」という能力以外の)言語の基盤を成す基本的な認知能力の1つの例として、「同一の対象を異なる視点から捉える能力」について簡単に紹介しておく。²我々は、実際に自分の置かれた空間的位置・心理的立場以外からも物事を捉えることができる。例えば、自分と離れたところにいる人に対して、ある物の位置を教える際に、その人がいるところに視点を設定して、「それは、君の正面の棚にあるよ」などと言うことができる。また、ある事柄が、自分にとっては好ましいことであるが、その事柄に関係する他者にとっては好ましくないことであるといった考え方ができるのは、物事を捉える際に、自分の視点・立場だけではなく、他者の視点・立場にも立つことができるからである。

このような「同一の対象を異なる視点から捉える能力」を基盤とする言語表現の例として、shore と coast がある。Fillmore(1982:121)は、この2語について、shore は視点が水上にある、すなわち、水上から見た「岸(水と陸の境界領域)」であるのに対して、coast は視点が陸上にあると述べている。つまり、この2語はいずれも「岸」を表している(プロフィールしている)が、異なる視点から

捉えていることなる。また、「昨日の試合は、中日が巨人に勝った」と「昨日の試合は巨人が中日に負けた」という2つの文は、同一の試合を異なる視点（異なるチームのファンの立場）から述べたものである。つまり、前者の文は、試合に勝ったチームである「中日」の視点（中日ファンの立場）あるいは中立的な視点から述べた文であるのに対して、後者の文は、試合に負けたチームである「巨人」の視点（巨人ファンの立場）から捉えたものである。

認知言語学の第二の特徴は、経験基盤主義の考え方をとるということである。つまり、我々の（身体を通しての）さまざまな経験が、言語（の習得・使用）の重要な基盤を成していると考える。これは、母語の習得において、経験よりも生得性（普遍文法の存在）を重視する生成文法とは明確に異なる考え方である。ただし、認知言語学が一般的な認知能力に関して生得性を完全に否定しているわけではなく、3節で見るように、認知能力の中には生得的であると考えられるものもある。

本稿では、4節で、我々が経験に基づき獲得する、語の百科事典的意味に注目し、メタファーの基盤として重要な役割を果たすことを明らかにするが、ここでは、言語の習得・使用において経験（に基づく学習）が重要な役割を担うことを示す（「百科事典的意味」以外の）1つの例として、「連語」について簡単に取り上げる。³連語とは「句を構成している各語の意味から句全体の意味を導くことはできるが、語同士の結びつきが（ある程度）固定しているもの」のことである。例として、「風邪を引く」「約束を破る」などがある。「風邪を引く」という句の意味は、「風邪」「を」「引く」という各構成要素の意味から導けるが、「(を) ひく」の代わりに「(に) かかる」「(を) 帯びる」などで言い換えることはできない。「(に) かかる」「(を) 帯びる」などは、文法的にはもちろん意味的にも、格助詞を介して（「ひく」と同程度に）「風邪」と結びついてもおかしくないと考えられるものである。同様に、「約束を破る」に対して、「約束を壊す」「約束を崩す」などとは言えない。

さて、連語は、その定義からも明らかなように、文法に関する知識（一般化できる統語規則など）と個々の語に関する知識（語の意味など）からは導けず、経験を通して（実際に触れることによって）身に付けなければならないものである（しかも、連語はどの言語においても多数にのぼると考えられる）。連語についてのこのような事実から、言語に関する経験基盤主義の妥当性の一端がわかるであろう。

以上、本節では、認知言語学の基本的な考え方について確認した。一言で言えば、認知言語学は、言語を認知能力に基づき考えるということ、また、言語の習得・使用において経験が重要な役割を果たすと考えるということである。

3. メタファーの認知的基盤

本節では、「比較する」という認知能力が、メタファーの重要な基盤を成すということを見る。⁴ここで言う「比較(する)」とは、「2つ(以上)の対象について、両者(複数のもの)の共通点・相違点を明らかにする」ということである。以下、まず、我々が日常の様々な(言語が直接関係しない)場面において「比較」という認知的営みを行っていることを確認し、「比較」という認知能力が、人間が有する認知能力の中で最も基本的なものの1つであることを示す。

感覚・知覚レベルでの「比較」から見てみよう。例えば、我々は、温度の異なる水(湯)に触れた場合、その温度の違いを知ることができる。また、(ある範囲の)高さや大きさの異なる音を聞き分けることができる。さらに、大きさの異なる2つの物を見て、その大小を即座に判断することができる。つまりは、触覚、聴覚、視覚などによって、複数の対象の相違点を容易に把握することができる。このようなことは、我々が意識的に行うにせよ、無意識に行うにせよ、「比較」すなわち「2つ(以上)の対象について、両者(複数のもの)の共通点・相違点を明らかにする」(この場合は、特に「相違点」という行為を行っていることは明らかである。なお、以上のような感覚・知覚レベルの「比較」の能力は、人間(の身体)に生得的に備わっている認知能力であると考えられる。

続いて、経験的な獲得という面を含むと考えられる「比較」という認知能力に基づく日常的な営みについて見てみよう。例えば、我々は、日常、スーパーマーケットなどでレジに並ぶ場合、複数のレジを比較して待っている人が最も少ないレジを見つけたり、買い物をする場合に、複数の品物を品質や値段の観点から比較して買う物を決めたり、選挙において、候補者を政策や所属政党や人柄の観点から比較して投票する人を決めるといったことを行う。このような日常の営みが、「比較」という認知能力に基づくことは明らかであろう。なお、買い物の際に、自分で決めた条件に合うものがあれば買うが、合うものがない場合は買わないという場合にも、比較が行われている。つまり、自分で決めた条件と個々の品物とを比較して、その類似性の度合いを算出しているわけである。

以上から、我々の（言語が直接関係しない）日常的な様々な営みにおいて、「比較」という認知能力が重要な役割を果たしているということの一端がうかがわれる。以下では、この「比較」という一般的な認知能力が、メタファーなどの言語現象の基盤ともなっていることを明らかにする。

ここで改めて、本稿におけるメタファーとは何かを確認しておこう。メタファーとは「2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」のことである。

以下、具体例に基づき見ていこう。まず、「トンボ」という語を取り上げる。「トンボ」とは、言うまでもなく、本来は虫の一種を表す言葉であるが、グラウンド整備に使われる道具の一種も「トンボ」と呼ばれる。これは、虫の一種とグラウンド整備の道具の一種を、全体的な形の面から「比較」して、両者の間に類似性を見出すことによって、本来は虫の一種を表す「トンボ」という語を、グラウンド整備の道具の一種を表すのにも用いるようになったということである。このように、「比較」（して、類似性を見出す）という認知能力がメタファーの基盤となっているわけである。なお、形などの外見の「比較」に基づくメタファー表現として、「トンボ」の他にも「目玉焼き」「月見うどん」「猫背」「鷺鼻」などがある。

次に、形などの外見の類似性に比べて、より抽象的な類似性に基づくメタファーの例として「故障」という語について見てみよう。「故障」とは、本来、おおよそ「機械などが正常に機能しなくなること」であるが、「肩の故障で、今シーズンを棒に振ってしまった」というように、「人間」に関して使われる場合もある。つまり、「故障」は「スポーツ選手などの体（の一部）が正常に機能しなくなること」も表せるということである。「故障」という語について、このような意味の拡張が可能になったのは、「機械などが正常に機能しなくなること」と「スポーツ選手などの体（の一部）が正常に機能しなくなること」とを「比較」して、両者の間に「正常な機能が果たせなくなること」という共通点を見出すことができたからである。この場合にも、「比較」という認知能力が重要な役割を果たしていることは明らかであろう。なお、近年、常軌を逸したことをしている人に対して、「あいつ、こわれちゃった」というような言い方が、主に若い世代に見られるが、この「こわれる」の意味の拡張も「故障」と同様の仕組みに基づくと考えられる。

続いて、「晴れる」という語を取り上げる。「晴れる」の本来の意味は、おお

よそ「雲がなくなり、青空が広がる」ことであるが、「心が晴れる」のように、天気の変化ではなく、心の状態の変化を表すこともできる。この「心が晴れる」などの「晴れる」は、「悩みなどがなくなり、心がよい状態になる」ということである。さて、「晴れる」の心の状態の変化を表す意味と本来の意味とは、「好ましい状態になる」という評価的な観点から見た類似性に基づくと考えられる。このように考える前提として、天気に関して「晴れ／晴れること」は、一般的に好ましいことだと我々が考えているということがある。このことは、「天気がいい」「好天」などの日本語の表現が「晴れ」を表すことから裏付けられる。

「晴れる」という語の本来の意味に関するこのような特徴に基づき、天気に関する場合と「悩みなどがなくなり、心がよい状態になる」こととを「比較」することによって、「好ましくないものがなくなり、好ましい状態になる」という共通点を見出すことが可能になる。なお、「晴れる」に加えて、「(憂さ・鬱憤・恨み・無念を) 晴らす」「(心が) 晴れ渡る」「(心が) 晴れ晴れとする」「晴れやかな(心)」などのように、心の状態(の変化)を表すことができる表現がある。

ここまで、「比較する」という認知能力が、メタファーの重要な基盤を成すということ、具体例に基づき見てきた。ただし、「比較する」という認知能力に関わる言語現象は、メタファーだけではない。ここで、メタファー以外で、「比較」を基盤とする言語現象の1つとして「大きい」などの形容詞の意味について簡単に取り上げる。まず、「ゾウは大きい」という文について考えてみよう。この文は、「動物の平均的な大きさ」あるいは「人間の大きさ」を基準として、つまりは、ゾウをこの基準と比較して、大きさの尺度のプラスの領域に位置付けていると考えられる。また、「このゾウは大きい」という文は、「このゾウ」を「ゾウの平均的な大きさ」と比較した結果を述べている。つまりは、「大きい」という形容詞の意味には、何らかの基準と比較するという意味が含まれていることになる。なお、「大きい」と同様に比較を前提とした日本語の形容詞には、「小さい」「高い／低い」「広い／狭い」「長い／短い」「遠い／近い」「深い／浅い」などがある。

以上、本節では、「比較する」という認知能力が、メタファー（及び他の言語現象）の重要な基盤を成すということ、具体例に基づき見た。

4. メタファーの経験的基盤

本節では、メタファーの経験的基盤についてやや詳しく検討する。特に、語

(などの言語表現)が有する、人間が様々な経験を通して身に付けた「百科事典的意味」が、メタファーによる意味拡張の重要な基盤を成しているということを主張する。⁵

ここで、まず、本稿における語(などの言語表現)の意味に対する基本的な考え方を確認しておく。本稿では、語(などの言語表現)の意味は「基本的意味」と「百科事典的意味」とから成ると考える。ここでの「基本的意味」とは、「語が指し示す対象のすべてに該当する意味であり、かつ、類義語との弁別的特徴を含むもの」のことである。⁶例として、後にメタファーの例として取り上げる、野球の「四番打者」という語を見てみよう。この語の基本的意味は「打順が4番である打者」である。この意味は、「四番打者」という語が指し示す対象すべてが満たすものである。また、「打順が4番である」ということは、他の打順の打者(「一番打者」「二番打者」など)に対して、弁別的特徴となるものである。

一方、「百科事典的意味」とは、「ある語が指し示す対象(の典型的なもの、代表的なもの)がもつもろもろの性質・特徴、さらには、その対象と関連をもつ(たとえば、その対象から連想される)様々な事柄」(靱山(2006b:170))のことである。例えば、「四番打者」の百科事典的意味の一部として、「そのチームの最も優れた打者(打撃面でチームに最も貢献することが期待されている打者)である」「長打力を有する」などが考えられるであろう。「四番打者」のこのような特徴は、「四番打者」という語が指し示すすべての対象が満たすものではないが、典型的な四番打者、あるいは理想的な四番打者が有する特徴であると考えられる。また、「四番打者」のこのような百科事典的意味は、我々が野球に接し、野球について理解するという経験を通して形成されるものである。

ここで、基本的意味と百科事典的意味を、言語共同体における慣習化の程度という観点から簡単に見ておく。まず、個々の語の基本的意味は、言語共同体に属するメンバーの大半が知るところの意味、すなわち、慣習化の程度が高い意味であると考えられる。一方、百科事典的意味には、「ある語が指し示す対象と関連をもつ(たとえば、その対象から連想される)様々な事柄」も含まれることから、メンバー各自の経験の違いなどに応じた個人差があると想定される。つまりは、ある種の百科事典的意味については、言語共同体の中で知っている人と知らない人がいる可能性があることになる。

なお、ここまでの基本的意味と百科事典的意味に関する説明から、両者は明

確に区別できるものであるかのような印象を与えた可能性があるが、筆者はむしろ両者は連続的であると考え。語の基本的意味と百科事典的意味は連続的であるという想定は、より一般的に位置付ければ、意味論と語用論は連続的であるという Langacker(1987)などの考え方に基づくものである。

次に、百科事典的意味がメタファーの基盤を成すことを見る前に、(メタファーは関わらないが) 百科事典的意味を認めないと理解できない語の使用例を取り上げる。「鳥」という語を含む次の例を見てみよう(以下、分析対象の表現には実線の下線を、何らかの点で注目すべき表現には点線の下線を施す)。

- 1 いよいよ夏のレジャーシーズン。夏のレジャーで欠かせないのがスポーツだ。海へ山へと心ははやるが、このところ目立つのが新しいスポーツの台頭。若い女性をリード役にどんどん広がりを見せている。他人と同じスポーツをやるのはつまらない。どうせやるなら面白いものをと、ヤングの好奇心はとどまるどころを知らない。今年夏の合言葉は、もっと過激に、もっと刺激を――。

(中略)

ジェットスキーが水面をはねるトビウオなら、空を飛ぶ鳥になろうというスポーツも急激に人気を集めている。その代表格が「ソフト・グライダー」。パラシュート型のグライダーだ。

「今のスポーツに根性ははやらない。いかに華麗に楽しくやるかが大切。その点、空を飛ぶのはだれもが望んでいること」。長野県の菅平高原観光ホテルでソフト・グライダー教室を今年春開講した中台章さんはこう言ってニッコリ笑う。ここには毎週末、鳥になりたい若い男女が続々とやってくる。(『日経流通新聞』1986年7月7日、日経テレコン21)

この例の最後の文に含まれる「鳥になりたい」という表現は、おおよそ「鳥のように、大空を飛び回れるようになりたい」という意味を表している。つまり、この表現は、「鳥」に「大空を飛び回れる」という特徴を認めないと理解できないものである。ここで、「大空を飛び回れる」ということと「鳥」の関係について考えてみよう。まず、「ペンギン」「ダチョウ」「ニワトリ」なども「鳥」であることから、すべての「鳥」が「大空を飛び回れる」わけではないことがわかる。したがって、「大空を飛び回れる」ということは、「鳥」の基本的意味

に含まれるものではない。一方、典型的な鳥、代表的な鳥は「大空を飛び回れる」ことから、「大空を飛び回れる」ということは、「鳥」の百科事典的意味の一部であると考えられる。このような「鳥」の百科事典的意味は、我々が、ある種の「鳥」が大空を飛び回ることを繰り返し見るという経験を通して形成されたものである。

以上から、例文1の「鳥になりたい」という表現を的確に理解するには、「大空を飛び回れる」ということを「鳥」の百科事典的意味として認め、さらに、百科事典的意味が言語の理解にとって必要なものであると考えることが妥当であることになる。

続いて、百科事典的意味が、メタファーの基盤として重要な役割を果たすということを、具体例に基づき見ていこう。まず、「たぬき」という語を取り上げる。「たぬき」は、言うまでもなく、本来は動物の一種を表す語であるが、「あいつはなかなかのたぬきだから、気をつけた方がいい」というように、ある種の人間を表す意味も定着している。人間を表す「たぬき」の意味は、辞書にも記載されており、『大辞林(第二版)』(p.1581)では、「(比喩的に)表面はとぼけているが、裏では策略をめぐらす悪賢い人のこと」と記述されている。さて、「たぬき」のこのような意味は、本来の意味からメタファーに基づき成立したものと考えられるが、その場合、本来の意味と人間を表す意味との間にどのような類似性を見出すことができるであろうか。ここで、「たぬき」に「人をだます(ことがある)」という特徴(百科事典的意味)を認めておけば、上記の『大辞林(第二版)』の意味記述との間に容易に共通点を見出すことができる。なお、「人をだます(ことがある)」ということは、「たぬき」が指し示すすべての対象に当てはまることではなく(というよりも、(現代人で)実際に「たぬき」にだまされたという経験を有する人は極めてまれであろう)、したがって、「たぬき」の基本的意味には含まれず、我々が、「たぬき」をめぐる言い伝えや昔話を通して身につけた知識である。「たぬき」に関する「人をだます(ことがある)」ということも、百科事典的意味が「ある語が指し示す対象(の典型的なもの、代表的なもの)がもつもろもろの性質・特徴、さらには、その対象と関連をもつ(たとえば、その対象から連想される)様々な事柄」であることから、百科事典的意味に含まれると考えられるものである。

以上、「たぬき」のメタファーに基づく意味を、本来の意味との関係で適切に位置付けるには、本来の意味の百科事典的意味が不可欠であることを示した。

次に、「あの人はお天気屋だから付き合いにくい」といった使い方がされる「お天気屋」という語を取り上げる。この表現は、「何らかの点で、『天気』と類似した性質を持つ人」という意味を予想させるものであり、「お天気屋」の構成要素である「天気」がメタファーとして用いられているものである。そして実際には、「お天気屋」は、「心の状態（気分・機嫌）が変わりやすい人」を表す。したがって、「お天気屋」のこの意味を、「天気」の本来の意味との関係で適切に説明するには、「天気」に「変わりやすい」という特徴（百科事典的意味）を認めることが必要になる。ここで、「天気」と「変わりやすい」との関係について改めて考えてみる。まず、「変わりやすい」ということは、「天気」が指し示すすべての対象に当てはまることではない。というのは、「天気」について「安定した天気に恵まれて、快適な旅ができた」というような言い方が可能だからである。したがって、「変わりやすい」ということは、「天気」の基本的意味に含まれるものではない。一方で、我々は、日本の「天気」は一般に「変わりやすい」という知識も経験に基づき持っている。朝、晴れていたと思ったら、間もなく曇ってきて、昼過ぎからは雨が降り出したといった経験をたびたびしているからである。このように、「天気」に関する百科事典的意味の一部として、「変わりやすい」ということを認めることができ、それによって、「お天気屋」（における「天気」）の意味との類似性も説明が可能になるわけである。

続いて、「四番打者」という語を取り上げる。次の例文を見てみよう。

- 2 「二年は本当に長かった」。食品安全委員会は八日、米国とカナダ産牛肉の輸入を条件付きで認める答申を出す見通しで、年内にも輸入が再開される。牛井チェーン最大手、吉野家ディー・アンド・シー社長の安部修仁（56）の脳裏には米国でBSE（牛海綿状脳症）が見つかった二年前のクリスマスイブの記憶が鮮明に残っている。

（中略）

販売休止はくしくも牛井単品の“一本足打法”から脱却するきっかけになった。定食など多様なメニューは幅広い顧客層を取り込む原動力だ。だが、注文を受けてから提供するまでの時間は定食類の場合、牛井の五倍の二分半。顧客の回転率が高い牛井販売とはビジネスモデルが違う。

米国産牛肉に対する消費者の反応に不透明さは残るが、牛井が吉野家の「四番打者」であることは変わらない。多様なメニューとどう両立させ、

打順を組むのか。二期連続最終赤字からの脱却へ向け、安部の采配が問われる。（『日本経済新聞』（夕刊）2005年12月6日、日経テレコン21）

この例文の「牛井が吉野家の『四番打者』である」という表現の意味するところは、「吉野家の多様なメニューの中で、牛井が最も代表的なもの（看板メニュー）であり、吉野家創業以来、最も多くの利益をもたらしてきたものであり、今後も最も多くの利益をもたらすことが期待されているものである」ということであろう。また、すでに見たように、野球における「四番打者」は、百科事典的意味の一部として「そのチームの最も優れた打者（打撃面でチームに最も貢献することが期待されている打者）である」という特徴を有している。このことから、「四番打者」の本来の意味の百科事典的意味の一部と、吉野家の牛井について述べた「四番打者」が表す意味との間に、「ある集合に属する成員の中で、その集合を代表する成員であり、高い貢献度が期待されるもの」という共通点が見出せる。このように、「四番打者」に関する百科事典的意味を認めることによって、メタファーに基づく新たな意味の成立の動機付けを明らかにすることができるわけである。

なお、「四番打者」のメタファーに基づく新たな意味は、本来の意味の基本的意味とは無関係であろう。つまり、「打順が4番目である打者」という基本的意味、さらにはここから導かれる可能性がある「何らかの事物が4番目に位置付けられる」ということは、「四番打者」の新たな意味にまったく貢献していないということである。

最後に、「夏（真っ盛り）」という表現を取り上げる。次の例文を見てみよう。

3 株や土地でお金を殖やすっていうことは自分には向いていないんですね。失敗したからいう訳じゃないですが、今は自分に投資するのが一番だと思っています。自分がかんばれば得するし、怠ければ無駄になる。すごくスリリングじゃないですか。

テレビドラマの「失樂園」でいただいた凜子の役は、書道の先生でしたから、死に物狂いでいろんなカルチャースクールを探して書道を学びました。その甲斐あって、今では掛け軸を作れるくらいになりました。

別の役では五十メートルをクロールで泳ぐっていうシーンがありました。

水泳のスクールに入ってがんばったら金づちだった私でも千メートルまで泳げるようになりました。

やっている時はレッスン代が無駄にならないように、としか考えていないのですが、身に付いたものはずっと財産になりますよね。

来年は四十歳になります。そこからまた新たな目標に向かってスタートを切りたい。二十代が新芽の時期としたら、三十代は夏真っ盛りでした。四十代はもっともっと華やかに、充実した実りの秋のような時期にしたいと思っています。(『日本経済新聞』(朝刊) 1999年10月3日、日経テレコン21)

この例文は、女優の川島なお美が自分のこれまでの人生について述べたものである。また、例文の内容から、川島なお美は、「三十代」において、女優としてより優れた演技をするために書道や水泳に励むなど、積極的に物事に取り組み、活動してきたことがわかる。したがって、例文中の「三十代は夏真っ盛りでした」という表現は、おおよそ「(これまでの人生の中で) 三十代は、積極的に活動した時期であった」という意味を表していると考えられる。さて、「夏(真っ盛り)」という表現がメタファーによってこのような意味を表せることの基盤として、「夏(真っ盛り)」は、本来の意味の百科事典的意味の一部として「(海や山などの屋外で) いろいろな活動ができる季節である」という意味を持っていると考えられる。「夏(真っ盛り)」に対するこのような百科事典的意味は、日本語話者の大半が有しているとは言えないかもしれないが、そのような話者が少なからずいると考えてよいだろう。また、「夏(真っ盛り)」に対する「いろいろな活動ができる季節である」という百科事典的意味を持っていない話者にとっても、例文3を通して、「夏(真っ盛り)」の百科事典的意味を新たに形成して、ここでの「夏(真っ盛り)」のメタファーとしての意味を理解することはさほど難しいことではないであろう。

以上、本節では、語(などの言語表現)が有する、人間が様々な経験を通して身に付けた「百科事典的意味」が、メタファーによる意味拡張の重要な基盤を成していることを、具体例に基づき明らかにした。⁷

5. おわりに

以上、本稿は、認知言語学の枠組みにおいて、メタファーの認知的基盤と経

験的基盤について検討した。その結果明らかになったことは、まず、「比較する」という一般的な認知能力が、メタファーの基盤として重要な役割を担っているということである。また、人間が様々な経験を通して身に付けた、語（などの言語表現）の「百科事典的意味」もメタファーによる意味拡張の重要な基盤を成しているということがわかった。なお、語（などの言語表現）の「基本的意味」と「百科事典的意味」は連続的であると考えるのが妥当だと思われるが、この問題については十分に論じることができなかった。今後の課題としたい。

注

- 1)このメタファーの定義は、佐藤(1978=1992)などを踏まえたものである。
- 2)「同一の対象を異なる視点から捉える能力」については、靱山(2006c)なども参照のこと。
- 3)「連語」については、Langacker(1987)、靱山(2002, 2006a)なども参照のこと。また、辞書において「連語」を記述することの重要性については国広(1997)を参照のこと。なお、連語とは性質の異なる句として、「本を読む／本を熟読する」「美しい花／きれいな花」などのいわば普通の句、「(好ましくないことから)足を洗う」「煮え湯を飲ませる」などの慣用句がある。つまり、普通の句は、連語とは異なり、語同士の結びつきが固定しているとは言えないものであり、慣用句は、語同士の結びつきの固定性に加えて、句を構成している各語の意味から句全体の意味を導くことができないものである。
- 4)「比較する」という認知能力の重要性については、Langacker(1987, 1999)、靱山(2002)、靱山・深田(2003)なども参照のこと。
- 5)「百科事典的意味(論)」については、Langacker(1987)、靱山(2002, 2003, 2006b)なども参照のこと。
- 6)本稿における「基本的意味」は、野村(2002)の「辞書的意味」にほぼ相当するものである。
- 7)メトニミーにおける百科事典的意味(百科事典的知識)の重要性については、西村(2002)を参照のこと。

引用文献

国広哲弥(1994)「認知的多義論 — 現象素の提唱 —」、『言語研究』106、pp.22-44、
日本言語学会

- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』、大修館書店
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』、講談社 [(1992)講談社学術文庫]
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」、西村義樹 (編) 『認知言語学 I : 事象構造』、pp.285-311、東京大学出版会
- 野村益寛 (2002) 「百科事典的意味論 (encyclopedic semantics)」、辻幸夫 (編) 『認知言語学キーワード事典』、p.206、研究社
- 松村明 (編) (1995) 『大辞林』 (第二版)、三省堂
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』、研究社
- 初山洋介 (2003) 「認知言語学における語の意味の考え方」、『日本語学』22-10 (9月号)、pp.74-82、明治書院
- 初山洋介 (2006a) 「認知言語学と言語教育」、『言語』35-4 (4月号)、pp.44-49、大修館書店
- 初山洋介 (2006b) 「1-8. 認知言語学」、鈴木良次 (編) 『言語科学の百科事典』、pp.157-177、丸善株式会社
- 初山洋介 (2006c) 「言語と認知：類義表現の意味の異なりにおける認知的基盤」、峰岸真琴 (編) 『言語基礎論の構築へ向けて』、pp.153-167、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 初山洋介・深田智 (2003) 「第3章 意味の拡張」、松本曜 (編) 『認知意味論』、pp.73-134、大修館書店
- 山梨正明 (2001) 「言語科学の身体論的展開 — 認知言語学のパラダイム」、辻幸夫 (編) 『ことばの認知科学事典』、pp.19-44、大修館書店
- 吉村公宏 (1995) 『認知意味論の方法』、人文書院
- Croft, W. and D. A. Cruse (2004) *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Evans, V. and M. Green (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fillmore, C. J. (1982) “Frame Semantics.” *Linguistics in the Morning Calm*. pp.111-137. Seoul: Hanshin Publishing Co.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago/London: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1*. Stanford: Stanford

University Press.

Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.